

The world's educational system seen through my eyes

第5回

“国際派大和撫子”が伝える世界の教育現場

西浦みどりの「大学の窓から」



国立大学法人山口大学客員教授(国際関係・コミュニケーション)、国際コンサルタント・評論家(オピニオンリーダー)。東京生まれ、英国育ち。英国王立音楽院で学び、卒業後ソプラノ歌手として活躍したが帰国後引退。1986年より総理府のインタビューアとして政府広報に携わる。その後、インベスター・リレーションズと都市開発のコンサルティング会社設立。  
http://www.nishiyuramidori.com

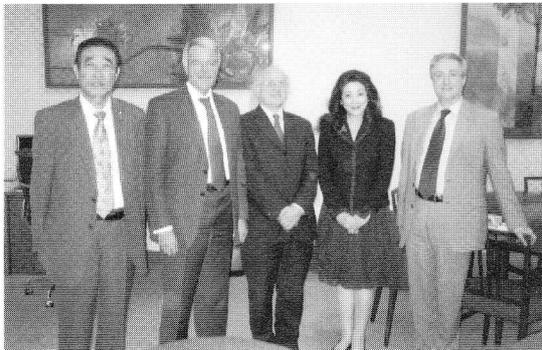
前

号で紹介したUCLこと、ユニバーシティ・コレッジ・ロンドンと、筆者が客員教授を務める国立大学法人 山口大学が昨年、大学間学術交流協定を締結したのを機に、両大学の相互教育理念について取り上げる。

UCLの特徴は、「平等」だが、理念は驚くほど山口大学と共通するものがある。例えば、グローバル化を推進しているUCLに対し、山大は、過去と未来が出会い、東西南北が交差する「知の広場」を提唱している。国際化が急務なのも認識しているからこそ、「東西南北が交差」する、わけである。個性を尊重する重要性、オンリー・

UCL②

ワンの大切さを認識するなど、双方の共通項は多い。



UCL 学長室にて。左から、丸本卓哉・山口大学学長、グラント・UCL 学長、タイラー工学部長、筆者、フォートン副学長

六月にUCLのマルコム・グラント学長より、同大学内で開催されたグロスターク公臨席のガラ・ディナーに、山口大学の丸本卓哉・学長が招かれ、三浦房紀・工学部長と「グローバル・リレーションズ大使」を任命された筆者も随行した。



UCLガラ・ディナーにて。三浦房紀・工学部長と筆者

次の日、学長室でグラント学長とじっくり話し合う機会があった。

同氏は法律家であると共に、UCL始まって以来の画期的な資金調達を成功させた「人たらし」(失礼)、経営者の要素も持ち合わせた学者であることが、会話の中で十分感じ取れた。その上、人を厭きさせない巧みな話術、柔らかな物腰でレディーに対する完璧なまでの紳士ぶりなど、学長というオールラウンドのすべてが最高であることを求められる立場に適する人とは、このような人間なのだということを感じさせられた。そうした意味では客観的にみても、丸本学長も、いい勝負といったところであった。

因みにUCLは、一九〇四年より過去二十人ものノーベル賞受賞者を輩出している。